

国岡彬一先生を悼む

大久保 喬 樹

すでに学報などで伝えられているように、国岡彬一先生が、ご定年まであと1年を残して、この3月逝去された。本来であれば、悠々たる余生をすごされるよう願って記すべきお別れの言葉をここに、こういう形で述べることになったのは、いかにもさみしいかぎりだが、お礼の言葉とあわせて、ひとこと記させていただく。

国岡先生は、昭和9年生れ、都立両国高校から東京大学に進学され、文学部国文学科で近代文学を専攻、ひきつづき修士、博士課程で研鑽を積まれた。学業生活を終えられると、ただちに教職に就かれ、白百合女子大等を経て、昭和58年、本学文理学部日本文学科教授として着任され、これまで20年近くをすごされてきたわけである。

先生が専門とされていたのは、プロレタリア文学を中心とする昭和初期文学で、その中でも、橋本英吉、徳永直など、比較的地味な、しかし、筋金入りの労働者文学に特に関心を寄せておられたようである。推察するところ、先生は、戦後の青春期に、かなり強く、左翼的正義感に燃えられたことがあって、こうした関心を養われたのではないだろうか。最近の文学研究ではあまり顧みられなくなっているが、文学というものを、単なる言葉の芸術としてではなく、時代の政治や社会とかかわらせて倫理的にとらえようとする文学観を先生は基本とされてきたようである。

といって、先生は、堅苦しい道学者というわけではなく、広く人間性全般を視野に入れて、志賀直哉、太宰治、梶井基次郎などをも論じられ、そこに見られる繊細な感受性、逆説的な心理などを細かくとらえようとされた。

だが、いずれにせよ、先生は、文学を通じて、人間というものに一貫したまなざしを注ぎつづけられたといえよう。昨今流行のあれやこれやの文学理論などに振り回されることなく、ただひたすら正面から人間と、その人間が営む社会を見つめる、それで本質的なものはとらえられるという確信に支えられて、先生の研究は続けられてきた。

そして、教育についても、先生は、まず、作品を十分に読み込み、ついで、その作品が書かれた背景、作者の人となりをきちんと調べあげて、総合的な考察をくだすというオーソドックスな手続きを学生に諄々と教え込むというやりかたを貫かれたようである。それによって、特に才気ひらめくというようなことはなくとも、基本をはずさない、まっとうな理解が達せられることがなにより肝要という教育観である。毎年、卒論の審査を先生と一緒にこないながら、先生の指導をうけた学生たちが、こうした薫陶の成果を発揮した論文を提出し、口頭試問に答える様子に接して、私はなるほどと思わざるをえなかった。こうした教育のありかた、それをうけた学生のありかたは、わ

が日本文学科、ひいては東京女子大の良き伝統の形成と継続に確実に資する貴重な糧となっただろう。

一方、先生は、大学運営の面でも、その磊落で、しかも、どっしりと落ち着いた人柄故に多くの信頼を集めて、学科主任、専攻主任は言うにおよばず、長期計画委員会委員長、図書館長等の要職を歴任されてその職責を全うされた。

しかし、20年近く、直近の同僚としておつきあいさせていただいてきた私としては、なにより個人としての先生の人柄がしのばれてならない。用事があって先生の研究室を訪ねると、先生は、大抵は、愛用の携帯灰皿を手に紫煙をくゆらせながらコンピューターの画面を眺めておられる。意外にもと言ったら失礼になるが、一見こうした電子機器類には興味がうすいのではないかとも見える先生が、実は大のマニアであり、機械音痴の私などにはちんぷんかんぷんの様々な情報を集め、あれこれ工夫されていたらしい。ついでながら、先生は英語もお好きなようで、よく英字新聞を読まれていたようだ。研究休暇を利用して欧米の日本文学研究事情を視察に行かれた際には、事前に英会話学校で特訓をうけ、ブラッシュアップしてからでかけたと聞かされ、ぐうたら者の私などは大いに恥じいったものである。

お酒も先生の大好物で、これが入ると、先生、赤い顔を光らせながら呵々大笑、すっかり童顔になり、一層人なつこくなって、「大久保さん、ベートーヴェンは、やっぱりフルトヴェングラーかなあ」などと、これも先生の趣味のひとつであったらしいクラシック音楽の話などしかけてくる。そして、やがては、女の子ばかり5人とかいう孫の話に移って、「この孫娘たちを両手にひきつれて銀座を闊歩するんだ」と気炎をあげる。

それやこれや、なつかしい思い出が走馬灯のように蘇ってくる。先生、本当に長い間、本学のためにお尽くしいただきありがとうございました。どうぞ、やすらかにやすみください。